



体験指導マニュアル

キジ車の作り方 (佐藤流)



この体験指導マニュアルは、2013年1月7日に長野原町在住の佐藤甲子様にはキジ車づくりを教わった時の内容を記録したものです。

伝統的な工芸品とはいえ、外見の形状に仕上げるための特別な技術は必要なく、かつては各家庭でそれぞれがキジ車をナタで作り、小正月に供え祀り、子供の玩具としてきました。それゆえに素人でもそれなりの『キジ車』を作って持ち帰ることが可能であり、現地体験プログラムとしては比較的容易に提供できるものと考えられます。「キジ車づくり体験」を実施運営するにあたって課題となるものは、

- ① ナタ、カンナなどの大工道具を人数分揃えるのは高価である。
- ② 刃物を扱わせる危険性。
- ③ 会場（大きな音が出る）と台木（角材）などの準備。
- ④ 伝統的な材料「ヌルデ」だけで人数分を常に揃えるのは難しい。

旅行には物見遊山的な「旅」と、日常とは違った他地域の風俗慣習や人の営みにもう一步立ち入って触れる「他火」という概念があると考えられます。どちらもエコツーリズム概念の範疇にありますが、後者の「他火」はより地域特有のもの、地域らしさをアピールできる旅行スタイルであり、地球環境問題意識の高まりから昔ながらの暮らし方はスローライフ、ロハススタイルとしても見直されています。近代の「〇〇ツーリズム」等の各ニューツーリズムでは「他火」を積極的に取り入れる傾向にあります。

長野原町の『キジ車』はまさに他では見られない地域特有のものでありますが、全国の農山村同様に、のんびりした田舎の暮らし方を、金と時間に追われる現代のライフスタイルに変容せざるを得なかった過程の中で、いつしか親から子への伝承も途切れてしまい、現在キジ車を作っている家庭はもはや数件しかない状況になりました。実際、すでに「ホダレ」「木造道祖神」「農耕具一式」など、長野原町に伝わってきた地域特有の『小正月のツクリモノ』の多くはすでに伝承者がいなくなり、絶えてしまいました。もう作り方を知っている人は誰もいないのです。どんな少ないもの・ことでも、消失してしまうということは私たちの豊かさを失ってしまうということです。『キジ車』は長野原町の『小正月のツクリモノ』の最後の砦とも言えます。

『キジ車』づくりを「現地体験プログラム」、すなわち観光素材として受け入れ体制を整えアピールし、できれば実際に受け入れることが急務と考えています。それが継続的に行われれば、地域住民はより積極的に、より自信を持って地元の伝統文化『キジ車』を継承していくことができるでしょう。若い世代が興味を持って取り組むためには、『地元の、私たちの文化で旅行者が喜んでくれた、感謝してくれた』という実体験が必要なのです。また、日の目の当たらない現状のまま放置しておけば、いずれ消失してしまうのは目に見えています。そのような理由から、当協会は『キジ車づくり』を『ものづくり伝道師 浅間・吾妻塾』で実施し、この「体験指導マニュアル」を作成いたしました。

以下（次ページ）に、「長野原町の民族」より引用した『キジ車』についての解説を記載します。

文責：赤木道紘

群馬県では一般的に1月15日の前後数日間を小正月といい、吾妻郡ではホダレとかハナと呼ばれるケズリカケを作って神仏に供え、繭玉づくりをします。こういったものを長野原町では「小正月のつくりもの」と言います。中でも同町のは種類が豊富で、祀り方・処分の仕方などについても他地域には見られないような特徴を持っていました。

その中でも、特筆すべきものであるのが「キジ車」で、本州では長野原町を中心とした一部地域でしか作られていません。一方、九州地方（大分県、福岡県、熊本県など）でも「キジ車」が作られていますが、小正月とは関係のない郷土玩具であるということと、由来が木材を運搬する木馬引き（キジ馬）から来ていると考えられています。ところが長野原本来の木馬（きんま）は車をつけないソリ式のものであり、長野原町のキジ車は国鳥の「雉子」から来ていると考えられています。

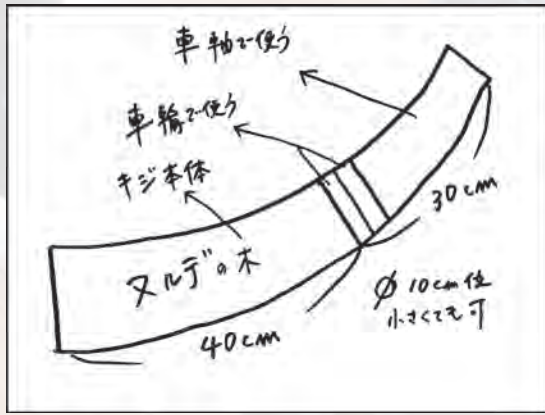
小正月のツクリモノの材料は、1月2日の朝、山入りと称して近くの山に行き、ハナ木（コメゴメ〔ミツバウツギ〕）、マイダマ木（ヤマグワ〔孀恋村のミズキは使わない〕）、ヌルデンボウ（ヌルデ）を伐ってきます。ヌルデンボウはオツカドとも呼び、大木にはならないヨタツ木（役に立たない木）で燃料としてもよくない木ですが、生長が早く軟らかく、細工には適した木でした。2日に山入りできない場合は8日や12日を避けて別の日に入ったそうです。

【なぜキジ車か？】

キジは古くから吉鳥としてよろこばれ、結婚式の料理にはなくてはならないものとされました。キジは夫婦仲がよい鳥とされ、母性愛が強く、子育ての上手な鳥として結婚式の吸い物の実に使われ（骨も叩いてつぶしてキジッポネとして使う）、暮には新婚夫婦から嫁の実家へ歳暮として雌雄一対が贈られるのを最高としました。姿、形、色彩のどれもすぐれ、食味も最高で、深く人々の暮らしと結びついていました。小正月に、その年の豊年万作を願って飾り立て、供えて祭る中にキジのつくりものも加えられ、それには豊獵祈願も含まれたとしても不思議ではありません。

「きじ」という名前から、木地屋（師）との関連を考えさせられますが、吾妻地方では本来の木地屋の存在はなく、木地屋がキジ車を作って売りだしたことはありません。あくまでも土地の人々が小正月に、小正月行事のためのツクリモノの一つとして作ってきました。六合村生須では小さいキジ車と木像道祖神と一緒に神棚へ上げて祭った後、おんべいや（どんだん焼き）で焼いたことは以前はキジ車が道祖神のノリウマ（乗馬）であったと考えられますし、長野原町大津のように、どんだん焼きの火をキジ車の背につけて家へ帰った話や、吾妻町岩下の「燃えさしをキジ車にしばりつけて帰り、屋根の上に投げ上げて火伏せとした」ということは、キジ車が単なる玩具ではなかったことを物語っています。川原畑での鳥追い行事には大人も子供も参加しますが、昔は小さい子がキジ車をひいて加わったそうです。鳥追いとは作物に害をなす鳥を正月に追って豊作を確実にしようとする呪的な行為であり、追われる「鳥」の中にはキジもいるはずですが、害鳥としてのキジが意識されてはいませんでした。キジ車にまとめられている雉子は鳥以上の何かになっていたでしょう。

近年の事例では『キジ車』は子どもの玩具となっていたそうですが、かつては神の乗り物だったことや、豊作・豊獵を祈願しての供え物であり、小正月の祭り終了後に子供に玩具として与えていたと考えられます。



《事前準備》

- 大きな音が出ても大丈夫な会場
- ブルーシート（掃除が楽なように）
- 角材数本（ナタを振り下ろせる台木として）
- 材料の丸太
（直径 10cm、長さ 70cm、くの字に曲がったヌルデがあれば最高）
- 会場にドリルをセッティング（車輪作り）

《道具（できれば一人一つずつ）》

- ナタ（大中小あるとベスト）
- 鋸
- ノミ
- キリ
- カンナ

《他の材料》

- カッター（ナタでも代用可能）
- 木工用ボンド（車軸を止める場合）
- 黒マジック（目玉や羽の模様を入れる場合）
- ドリル（車輪に穴を開ける）



《体験指導の手順》

参加者が揃ったら、まず、キジ車が長野原町地域特有のものであることや、「小正月のツクリモノ」、キジ（国鳥）についてのお話をします。

次に、材料（曲がった木）を配布、あるいは各自で選びます。選ぶ場合はキジ車の完成品を見本にして、上記の使用部分の説明をした上で選んでもらいます。

キジ車の材料は曲がったヌルデを使います。昔は、山入りにはどこの山にも入っても良いことになっていて、他人の木を切っても文句は言われなかったそうですが、今はそうはいきません。

なお、完成品に目玉や羽の模様を黒マジック等で描いても構いません。ただし、伝統的には九州の様に着色はしませんでした。





まずはくの字に曲がったヌルデの外側、下になる部分を大きめのナタで大胆に切り落とします。「腹出し」とも言えます。床を傷つけないように角材の上で作業をします。



切り口がきれいな平面になっているか、下から上からと確認しながら作業を進めます。



置いてみると、まだかなり切り口は曲がっている事がわかります。どんどん切り落としていきます。



腹がおおよそ出たら、首の最も凹む予定のところに鋸を少し入れます。その位置関係を見ながらさらに腹を削ります。





腹を下に置いてみると、かなり水平になってきました。首の鋸を入れたところをナタで凹みを広げていきます。



腹の浮き具合をもう少しなんとかします（腹を平面にします）。一回り小さいナタを取り出し、少しずつ丁寧に削ります。



これで、ピタッとお腹がつきました。場合によっては、ここでイメージを高めるためにカンナをかけても構いません。



いよいよ首を決めていきます。首の凹み部分に鋸を少し入れ、前後からナタを入れてV形を深くしていきます。





上記の作業を繰り返します。少しずつ左右にもV字を広げていきます。



一気にではなく、ほんの少しずつ、根気よく作業します。やがて細い首ができます。



次に、頭をカットします。鳥の頭の幅は胸よりかなり狭くなるので、左右は割と大胆にカットします。



様々な角度から確認しながら。正面からももちろんです。ナタの根元の方を使って少しずつ削ります。





足で挟めて削ったり。置いて後ろから眺めてみたり。



この体勢は名人の佐藤師匠ならではのものですが、大きいものを作るのでしたらこの体勢はおすすめです。



ずいぶん、形がまとまったようです。後頭部もきれいに整えて、



ボディの仕上げはカンナがけです。顔をかけたがり、角張ったところを、落としたりします。





胸まわりにかけてやったりと、きれいにします。



ヌルデの美しい木目をよく出してあげましょう。ヌルデの木目はケヤキのように美しいです。細工物にヌルデを使うのは材質が軟らかいためとされていますが、キジの美しい羽模様を表現するのにも、この美しい木目は役立っています。

ここから先は別のサンプルを使います。頭部分はたいへん欠けやすいので丁寧に削りましょう。



まずは車軸を作ってみます。



この車軸は軟らかいヌルデだからこそできる代物です。まず、適当な長さの枝を用意し、ナタで一辺が正方形の長い直方体にします。





直方体をキジのお腹の部分にあてて、胴体の幅より約5ミリ外側の位置に印をつけます。



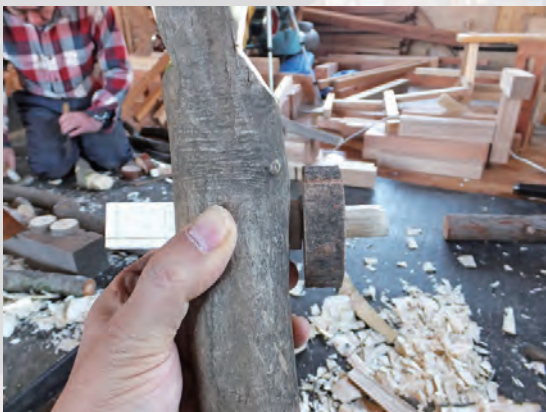
印をつけた所から外側を円筒状にします。四つ角に鋸を少し入れ、ナタで角を落とし、



小さめのナタ、あるいはカッターなどで形を整えます。

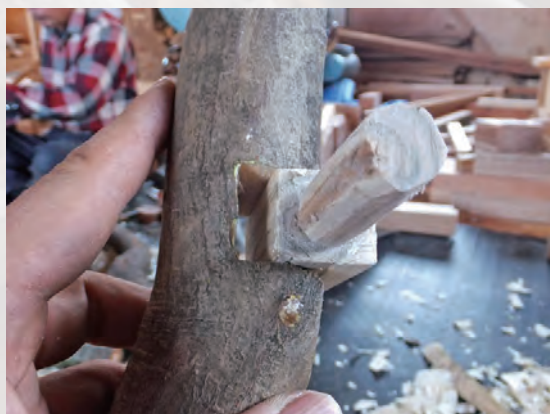


先に削った方（ここでは右側）には車輪を入れ、キジの腹に仮置きします。車輪と胴体の距離は車輪が回るように5ミリは空けましょう。動かないようにして左側の車軸に印をつけ、同様に印の先を円筒状に加工します。





車軸をそのままにして裏返しし、キジの腹側にも印をつけ、鋸で切り込みを入れ、ノミで落とします。



胴の切り込み（アリ）に車軸がはまりました。



次に車輪が回るようにします。車輪が引っ掛からないように、車輪から3ミリ以上離して印をつけます。そこにキリで穴を開けて、



円筒が長すぎたら鋸で落とし、さらにナタで円筒先の角を落とします。





最後に車輪止め。細い爪楊枝のような棒をつくり
ます。両方の太さが違うように作ります。



それをキリで開けた穴に刺してしっかり止め、棒
が長いようならカットします。

車輪は、特別な工具が必要ですので、今回の工程
では省きました。実際の体験指導現場では、ドリル
を持ち入れセッティングし、参加者が輪切りに
した木に穴を開ける作業が必要となります。



グループ体験の場合は、各自が作った「キジ車」
を発表してもらい。感想等を言ってもらいたいと思
い出になります。最後に投票をしてみてもいいで
しょう。

